

学位論文審査の要旨

学位申請者	中村 美和子 人間発達科学専攻 2016年度生		論文題目	昭和前期における口演童話の変遷 ——教室童話、放送童話への展開 に注目して——
審査委員	主 査:	小玉 亮子 教授	インターネット 公表	学位論文の全文公表の可否 : 否
	副 査:	刑部 育子 准教授		「否」の場合の理由
	副 査:	富士原 紀絵 准教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	浜口 順子 教授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	加藤 理 教授 (文教大学教育学部)		<input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博士 (社会科学)			<input checked="" type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
(英語名)	(Ph. D. in Child Studies)			<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
				※本学学位規則に基づく学位論文全文の インターネット公表について

学位論文審査・内容の要旨

本論文の審査は、第一回が2020年中6月22日、第二回が同年8月3日、公开发表会を8月24日に行い、最終審査会は公开发表会の終了後に引き続き行われた。

本論文の目的は、明治期から昭和初期までに児童文化の主要な柱の一つであった口演童話について、1930年代からアジア・太平洋戦争の終結にいたる時期に注目し、それがどのように変遷したかを明らかにすることである。そのために本論文では以下の4つのリサーチクエストが設定された。(1)創成期に社会から「娯楽」と受けとめられていた口演童話は、教育界にどう受容されていったか、(2)初期の子ども向けラジオ放送は口演童話家の番組協力で成り立っていたといわれるが、それはどのようなありようだったか、(3)1941-1945年の国民学校放送では、どのような童話が語られたか、(4)戦時下の日本少国民文化協会童話部会の動向はどのようなものであったか。

研究対象としたのは関係者がのこした直筆や謄写版印刷になる童話台本、実践者と研究者たちによる研究成果の機関誌などの史料である。これらの分析の結果、以下のことが明らかになった。第一に、教育界に従事する人々の行った口演童話の特徴として、人間形成を意図した教室童話の『指導精神』が見られること、また、そこには教育的配慮のある表現技法があることが明らかになった。第二に、初期ラジオ放送の分析からは、口演童話家による放送童話の確立への協力が見られた。第三に、国民学校放送において、遊びを中心とする幼児らしい生活が意識された一方で、遊びの場面にも戦時下に沿うモチーフが多用され、1940年代以降になると皇国の道を歴史的に理解する「国民的思想」の教育が目ざされたことが明らかになった。第四に、戦時下における日本少国民文化協会童話部会の活動から、日本少国民文化協会童話部会の積極的な国策への協力を見ることができた。以上、四つの研究結果を踏まえ、昭和前期の口演童話の変遷を「教育文化」、「戦時文化政策」の視点からまとめた。その結果、教育関係者が多かった口演童話家たちの職業的使命感による「国民的・民族的熱意」(宮原 1943)が、当該時期の口演童話の隆盛をもたらしたことが明らかになった。

以上の論文内容について、第一回審査会では、まず、先行研究の検討に再考の必要性があることが指摘された。不足している先行研究を補うと同時に、研究の蓄積を踏まえた先行研究に対するクリティカルな分析が必要であることが指摘された。また、児童文化という概念が読み手に理解できるような説明が必要であると言ったコメントがなされた。第二回審査会では、先行研究との関係についての分析や資料の限界についての指摘がなされたが、論文は全体として概ね了承され、表現についての修正などを踏まえれば、公开发表会に進むことが了承された。

8月28日に公开发表会と最終審査会が行われた。公开发表会では、論文の全体像についての概略を発表したのち、質疑応答が行われた。論文の教育学における位置付けや放送研究に関わる質問、資料に関する質問、さらに、メディア史の専門家からの質問もなされた。多くの質問に対して、適切な回答がなされ、活発な質疑となった。

公开发表会の終了後、最終審査会が開催され、資料の問題など今後の課題は多く残されているが、要点を捉えた発表であり、適切な質疑が行われたという評価がなされ、審査員全員によって、博士(社会科学)、Ph. D. in Child Studies として認められる論文であるとの結論となった。